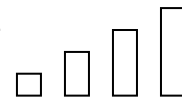


動から或る程度に *abstrahieren* [抽象]して考えてみると、そこに国法が出るわけである。それはつまり各個人を律する *Norm* [規範]であり、国家の *Nomos* である。この故にギリシャの *Nomos* なるものは *Citizen* に対し無上の *Authority* を有するに拘わらず、常に各 *Citizen* の行為の間に自然に表われる *Norm* であるのであって、ユダヤの法概念とは全く異なるもので、国家、*Citizen* を離れた *Norm* ではないのである。

要するに、かかる考えよりすればギリシャの各個の *Citizen* が自分を独立した不可分のものと考えると同じ心理状態でギリシャの *City* を考え、それに即して国家を考え得た訳であって、従って又国家生活の中に全ての生活が包含せられる訳であり、これが又そこに *Kulturstaat* [文化国家]が成立する所以である。

かくの如くギリシャ人は調和ある国民、二重人格の苦痛を知らぬ国民であると同時に又おそろしく“目”の国民である。ギリシャ人が団体生活と言う具体的なるものに直面して各個がその *Träger* [担い手]として考える時、その生活の本体が不思議に *plastic* に表われる。つまり心的 *Prozess* [過程]が *Prozess* とは考えられず、つまり *dynamisch* [動的]ではなく *statisch* [静的]に、平面的にそれが映るのであり、言わば内省する自己と内省せられる自己とが *plastic* に心の中に表われ来る傾向を持つわけである。その場合に物の本体、*Idee* [イデー]を観得ると言う所から自己を内省して或る程度まで調和ある絵が出る。同時に、その調和の底にそれが在ると考える完全なる *Idee* が又 *plastic* に出て来て、あたかも現実に生活する自己の絵が理想的なる絵の *Projection* であると言う傾きを持った国民である。別言せば、目の国民である言うところより、日常動きつつある心理状態が、言わば活動写真的に、平面的に写真をとり、多くの絵に分解して見て、それを再び、くっ付けることによって我々の *Prozess* に還元するとでも言うべきである。後述するドイツ人の考えは、これを動きそれ自らの中に *Prozess* を見るのであるが、それとは異なった傾向である。Aristoteles の発展説もその好例であって、近いものを

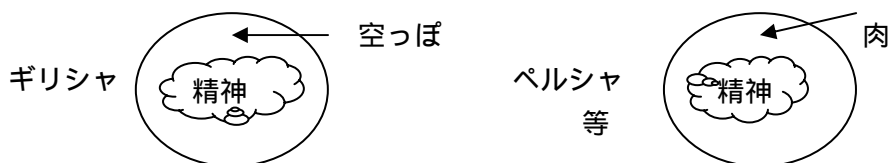


て、それを *Entwicklung* [発展]と観るわけであって、そこには常に *Jumping* が必要である。かくの如くに自分自己を平面的に考えると同時に、その底に調和と言うものが完全に行われる状態を観ると言う傾向である。指導原理なる *Wert*、真理とも言うべきものをば、動きの中に観るのではなく、それを *plastic* に描き、現実の状態をそこまで引っ張り上げると言う考えである。つまり *Werden* [生成]の考えが平面的に分解翻訳せられるのである。現実と *Idee* とが異なった平面に対立して、一方が他を招いているのである。これをギリシャ人の特色と見てよいのであって、ドイツ人の考え方と異なる点である。

かかる特色ある考え方からしてギリシャの政体が考えられるわけである。*Sparta* には王が二人あり、王の意見が一致しなければ国王の意志が効力を発揮しないのであって、つまり王の底に王位とも言うべき本体を考えているのであって、この点ローマの所謂 *veto* [拒否権]の権限と異なる所である。かかる認否権の制度はギリシャには存しない。尤も、目の働きが非常に強かったと言う事の結果、少しその、そう言う具合に定められた国家とか *Kollegium* [官僚]と言うものが、ややもすると - 文化の衰えた時には - 各個人の行動と離れて存在するかの如く考えられる傾きがある。後になって鬭争盛んとなり貴族と平民とが党をなして相争うこととなった時には、その奪い合う地位が個人から離れたと考えているのであるが、これは目の働きが強すぎることから *degenerate* [退化]した形であると説明

され得る。その国狭く且つ人民も少ないと言う国家形式も、Sparta とその Perioken [付属国] との関係も、Athens の海軍同盟も、皆これ “ 目 ” の働きの強きより来る Gruppenplastik [集合体] の傾きであると考えられる。

そう言う場合にギリシャ人は、目の働き強きところより現実の世界と Idee の世界とを対立せしめる傾きを持つ。そこに Dualismus [二元論] に陥り、又霊・肉二界を考える如き傾向があるのであるが、しかしその Idee の世界も個々の現実の世界から idealisieren [理想化] して考えたものであるから、現実を発展せしむれば Idee の状態に到達し得べき場所であるとするのであるから、この両世界は本来同じ平面にあるものであって、別に本質の異なった性質 - - 肉とか悪とか - - があるからと言うのではない。つまり質を異にするものの合成物だからと言うのではなく、全くの Defekt [欠陥] と観るわけである。故に現実と Idee とは同一平面と言うか同質と言うか、要するに別のものではない。現実世界はつまり Erscheinung [現象] の状態であって、それは単なる Schein [光] ではない、「表われ」であって仮象ではない。この点インド等と大いに異なるところである。かかる自信の存するところより、二元論になり得る可能性があったにも拘わらず、彼等は二重人格の苦しみに陥らなかった所以である。即ちそこには Idee への努力が発生している。これが後に述べる我々の日常の行動を、彼等は永久の繰返しと考えるに拘わらず、その努力を失わなかったと言える所以である。



しかしこの二元論になる要求が含まれているところから、努力への自信が失われて来ると、どうしても一元論は破れ、ペルシャの霊肉対立の思想、乃至はユダヤの如く “ 神の世界 ” と “ 人間の世界 ” とを区別する思想と結びつき得る可能性が表れ来るわけである。

以上の如き特色ある一元論的立場からしてギリシャの国家制度を説明し得る色々な結論が導き出される。

第一は絶対真理主義である。ギリシャの Idee の世界はその発生の経過から考えると、結局それはギリシャ人が心の内に体験した心理状態を外界に project して、完全なる調和を観、その Subjekt を想定し、それを本体の性質なりと考えたのである。つまり具体的経験を目の力によって project [すること] により客観化したものと見られ得るのである。強いて言えばギリシャ人はかかる Idee の世界を客観的なものと信じた所にある。兎に角も、Idee を見て、それが実在すると信じた以上は、真理なるものは一つでなければならぬ。同じものについて二つ以上の真理があり得る筈がない。もし、かかる論者ありとすれば、その論者が Defekt あるところから出て来た論なりと見る。故に、見る人が完全であるならば、つまり修業精進の結果その徳を明らかにすれば、全ての人がかかる Idee を見る訳であって、それは同じ一つのものでなければならぬ。かかる考えよりして Idee の世界は普遍であり、真理であるところの普遍妥当性を有するわけである。ここにギリシャ人の智徳一致と言う考えが生ずる。徳ある人にして初めて完全なる智識が得られると考えればこそ、ギリシャ人は優れたる人の説を聞くと言う貴族主義が出て来るわけである。徳

高き英雄を以て神の権化なりと見、立法者を崇拜して立法をなさしめ得た所以である。この意味でギリシャ人は *Absolutist* [絶対主義者] である。

第二は *Universalismus* (総体主義) である。これは *Pluralismus* に対する語である。ギリシャ人が前述せる如く現実の世界から *Idee* の世界を見得ると言うは理論を超越した直観の世界である。何故に見えるか、何故に実体であるかと言うことは理論では分からない。全くの *irrational* な、直観で出て来るわけであるが、一度直観せられた後には *Idee* の内容が *rational* に理論づけられる。と言うのは調和と言う所からして、その調和の *Subjekt* を見るわけであるから各個のものは全体に包含せられたる程度に於いて価値があるのであるから、上の方から真理性、価値性が与えられるわけである。つまり *Allgemeine* [総体的] なものが価値ありとするのであるからして、個体はそれに包まれたる限りに於いて価値がある。従って国家あって *Citizen* があるのである。*Universalismus* を作る所以は *irrational* な直観であるが、直観の後には合理的に組立てられる。故に *radikal* な国家改革もギリシャに於いては実現し得るわけであり、現在の国家を「発生するもの」と考えるよりは物の本体を考えて行くのであるから、*radikal* な改革が可能である。即ち偉人さえ出ればそれが出来る。それが *Solon* の場合の如く、又リクルグスの場合の如くに *rational-radikal* に国制改革がやれた所以であると思う。しかし、これと同時に *Pluralismus* [多元主義] の立場を無視しているのではない。と言うのは、目の人であり、具体的なものの中にそのものの本質を観るのであるから、国家もまた各個人の行動に即しての国家である。その故に各個の *Citizen* が国家中に包含せられると言っても、それは *Constellation* [星座] に置くからそう考えられるのであって、つまり *ästhetisch* [審美的] とも言える。各個人の行動が止めば国家も止むわけであるが故に各個が動いていることを要する、それが *Pluralismus* と言うか、つまり *Demokratie* の考えである。

かく自分自己の体験が中心であって、それから国家を考えるのであるから、自分が完全になれば、それらの人の集まりなる国家も完全なる調和あるものでなければならぬ。国家の理想は、調和あり完全なる *Citizen* を作るにある。ユダヤの如く神の意志を実現するための国家ではない。故に又ギリシャでは国家生活の中でなければ個人も完全になれないのである。そこで各個人が努力して国事に参与すると言うことが *Aufgabe* [課業] として、*Mission* [使命] として認められるわけであり、それと同時に完全なる域に達した人には嫉みなしに頼り得る訳であって、衆人を導くのが哲人たる者の義務であると言う考えが出て来る。ここに貴族主義と平民主義の並立が可能となるわけである。それと同時に人間完成すれば国家また完成するのであるから、後世になって、哲人の調和、それがやがて全体の調和であると言う考えが国家生活に失望せる時に当たって発生する所以でもある。これと同時にかくの如く国家は個人完成以外に特別の *Mission* を持たぬところからして、ギリシャに於いては分業と言う事が発展しないわけで、つまり市民は同時に哲人であり、軍人であり、詩人であり、政治家であることを理想とするのである。全ての人間が全ての方面に完成すると言うことになる。これが *degenerate* して来た時には、個人の理想は物質的に楽な生活をすると言う風になって来て、国家は個人を維持するものだというわけになるのである。

第三は、*Intellektualismus* (主智主義) である。つまり目の力で物の本体と考えられた *Idee* が認められ、それと現在の状態とを比較して、そこに *defect* ありと見るところから

して、そこに Idee に近づかんとする努力が出て来る、活動慾が発生する。つまりギリシヤ人は到達すべき目標が plastic に描かれぬ間は動くべき道徳的義務を感じない。ギリシヤ人が安んじて動き得る所以は自己の力で Idee を見破って、それへ努力しさえすればよいと言う自信があったからである。故に動こうという慾望より後に目標を求める、又は動きそれ自身に満足を感じるというのではない。Intellekt[智識]が先きであって Wille[意志]が後である。これを自分は、Intellektualismus 又は「論理的」と言うのである。故に改革を行う際でも、先ず Utopia[理想型]を描いて後 willen [やろうと]するのである。それは今日の Marxismus [マルクスイズム]の如く、動きそれ自らに価値ありと見るのではない。又ギリシヤ人は理想への憧憬が強いために、それに到達すべき Prozess を考えることが下手である。故にペルシャと言う大敵を控えて、国際連盟を成したが、その運用方法については違算があるように思われるのである。要するに彼等は praktisch ではない。

第四は、Utilitarismus (功利主義)である。ギリシヤ人にとっては Idee の世界は永久の存在であって、日常の努力は Idee 実現の精進である。したがって現象界の各個人について考えると勿論そこには進歩があるわけである。しかし、ギリシヤ人が「目の人」なるところから常に自分の立っている地位を plastic に描き、それを Idee と比較することにより価値を判断する傾きがある。つまり時の経過を考えないと言うか、つまり Idee を、努力している Subjekt[主体] に引っ掛けて考えない傾向がある。即ち常にその Prozess を切って見て、Idee との差を考えるとすべきである。かかる訳であるから何時でも現実界にいる個人を考える場合にも Idee と比べて考えるところからして、具体的なる個人の価値を疎かにする傾きがある。故に個人それ自らの生い立ち等は問題にならない。即ち Personality は考えるとしても Individuality は考えない故に、従って又個人がつねに typical になる傾向がある。個性を書くと言うよりも、個性の中心にある Type を書くと言うことになる。故にギリシヤ人の彫刻や絵を見てもそれが誰であるかが問題にならない。彼等にはそれは人間であり、美しい女でありさえすればよいのである。即ちこれは結果を考えるのみで、道行きを考えない、その意味で功利主義と言うわけである。この故に我々の生活は永久の繰返しである。誰がやっても同じ所へ行くのであるからキリスト教の言う如き歴史の einmalig [一度きり]と言う考えが出て来ない。キリスト教に拠れば我々の生活は神の Plan に従っている歴史であるからして、歴史的な事件は一度切りの事件なりと言う考えであるが、かかる考えは全くキリスト教以後のものであって、ギリシヤ人にはこれは存しない。かかる傾向から、各個人の目的なる個人完成とかも、努力の間に幸福を求めるのではなくして、その結果得たところのものにつき判断する傾きがある。故に国家が衰えて来ると、国家は個人を養うべしと言うことになり、経済の方でも生産が問題とならずに消費のみが問題となる。つまり享樂を問題とするのである。第五に、Naturalismus (自然主義)の傾向がある。ギリシヤ人の生活は永久不変なる故に、つまり Idee に到達し得べき素質が我々に与えられていると見るのである。自然のままに努力すれば実現出来ると見るのである。この点キリスト教の Super-Naturalismus[超自然主義]とは逆である。従ってギリシヤ人は活動と言うことはあるが、creation と言う考えが、キリスト教程強くない。キリスト教では与えられた状態を超越して初めて理想に近づくのであり、所謂 create であるが、ギリシヤ人では与えられたものを develop しさえすればよいと見るのであるからして、キリスト教程、苦しんで一生を送るのではない。このためギリシヤ人の日常の生活

は、真面目な生活であると同時に、春の如き朗らかさがあるわけで、享樂しつつ努力すると言う気分が出る所以である。ギリシヤ人の特色なる Sports なるものはかかる意味よりして重んぜられたのであろうと思う。

以上色々を考えて見たが要するにかかる諸傾向はギリシヤの特色ある一元論より導き出されるわけである。即ち個々のものの中に本体を觀る能力ある個人であり、目の国民たる特色より導き出されるわけである。

次にかかるギリシヤ人が如何にして他の文化と結合するようになり得たか、即ち [ペロポネソス] Peloponnesos 戦争時代に、ギリシヤの特色が如何なる形をとって残るかの問題が残るわけである。

(第四回 終)

2001.1.20 W.P end 中路

第五回． 昭和九年二月五日

これまでの講義の問題は紀元前五世紀のペルシヤの盛んな時代までに完成したギリシヤの国民性であったが、今日からはかかる特色ある Stadtstaat [都市国家] がどうして Alexander 大帝の独裁的専制主義に推移ったかと言うことであり、それは前述した国民性が如何に変わってギリシヤの末期に表れるか、と言うことを見、それが末期に於いても、多少 modify されても尚残って gelten [通用] すると言うこと、他方では Theoretisch-Subjektiv なギリシヤ文化が後に如何にかわって行って、初めて他のユダヤ、ローマの文化と合流し得たかを見ることになるのである。

紀元前五世紀の中頃、Perikles [ペリクレス] 時代のギリシヤでは国民が全て国務に参与する Demokratie があると同時に、優れた者がこれを導くと言う Aristokratismus [貴族主義] が存するわけであるが、それが Perikles の死後段々瓦解して行ったわけであり、殊に Athens では第四階級を海軍に採用した結果、その勢力盛んとなり、日給を受けんがために民会に出席するということになった。これまで民会では役人が出した案に国民が可否を決すると言うのであったが、議会在が勢力を得て来ると決議と言う制度、即ち Psephismata の制を起し、その決議は法律にはならぬが、事実上役人の行為を抑制すると言う事になり、かかるところから Demagog [扇動者] が Citizen の passion に訴えて民会の勢力を握る、従って、隠れたる Leader が民会を支配し、従って Athens の国務を支配すると言う事になる。それが増長すると Leader の力がなくなり、民衆即ち Demos の主張するところに押されて、民衆の言う事を民会で主張するということになった。かくして民会の性質は変じ、その時に“現に生きている” Citizen 即ちこれ Athens 国家であると考えられ、朝令暮改と言うことになり、民会の信用は全く地に墜ちてくるわけである。即ちかくなると“考えある人”の民会に対する信用はなくなり、ギリシヤ政治生活の根本なりし団体生活の中に於いてのみ個人の生活が完成せられるとの考えが破れ来り、つまり民会を改革して理想国家を実現する力ありとの自信が失われて来る、かくなるともともと前述せる如くギリシヤ人が「目の人」であったために Dualismus [二元論] に陥る危険を多分に持っていたところから、自ら理想と現実とが分かれてくるわけである。

当時の思想界を考えると、Perikles の歿後に於いては小アジアのギリシヤの City がペルシヤの力に压せられ、その colony の人々の有為の士は皆本国殊に Athens に移り来った。かくの如く母国 都市 喪失したところから、個人的になり世界的になる所謂 Sophist [ソフィスト] が Athens の町に集まり来るわけであるが、この Sophist の思想は、分解の方法によって物の本体を見ると言う極めて intellectual なものであった。元々小アジアのこの考えは Demeter 崇拜の Mystik [神秘教] より来たものであった。従って世界人と言うも、唯内的に調和ある人と見られたのである。“目の人”であるギリシヤ人が一度 plastic が絵が作られると、それをば自分を離れて objektiv に見ることになる。即ち外から外界を考え、自分自己とは別に外のものを systematisieren [組織化] するとの傾向が出て来た。故に社会生活、City 生活、国家生活も等しく我々と離れて存するものと見、これを目的論的に解せずして、如何にしてかかるものが出来たかを説明するのみとなった。例えば宗教の方を見ても、それを我々の如何なる慾求より出た秩序かと見るのではなくして、我々の功利主義から宗教を導き出す。甚だしきに至っては僧侶は自分の生活のために宗教なるものを作ったのだと見るに至る。即ち kausal [因果的] にこれを説明すると言うこと

になった。外側から *Kausalisch* のみで捕らえることとなった。

かくなると、これまで宗教、風俗、習慣とか法律とか言う我々の生活に *Authority* をもっていたものの権威がなくなり、外側からこれを説明せられ、全く各個人の利益から作られたものであると観らるるに至った。即ち *Athens* なら *Athens* の国家をその当時に生きた人の *Athens* であると、従って自由に法律も替えることが出来ることになった。尤も、*Sophist* も全然勝手に秩序を考えたのではなく、そこに *objektiv* な規範を持ち、つまり自然法の考えからやって行ったものである。即ち *Physis* と *Nomos* (自然法と現行法) を考え、*Nomos* を自然法 (*Physis*) によって改めようとの考えであるが、その自然法の定め方は現社会を分解して、もう分解し切れないものに到達した時、そのものが社会の起源であり、そこから再び作り出したものが“自然”であると考えたわけであるから、かくなるとギリシャの国家生活がもともと平民主義と貴族主義の巧みな合致によるものであったから、分解すると“二つ”となる。故にその何れかに *Accent* を置くことにより自然法もまた異なってくる。即ち一方では平等を唱え、他方ではまた不平等の支配を高調する者があると言うことになる。尤も、普通の *Sophist* は理屈を捏ねて自分の利益を主張することを行なったのであった。

かかる考えからして、*City* の内部で貴族党と平民党との争いが盛んとなって来る。元来 *Athens* へ移り来たった人々は母国と言う思想が弱められたる人なるを以て、貴族・平民の争いが盛んとなると、甲 *City* の貴族党が乙 *City* のそれと結ぶと言うことになり、ここに争いは *Interstadt* の傾向を帯び来たり、平民党の傾向強きものは *Athens* を中心とし、貴族党を強く主張する者は *Sparta* を中心とすると言うことになり、ここに *Peloponnesos* 戦争 (431-404 v.Chr.) が起こり、*Athens* 敗れ、又その海軍同盟も敗れた。*Athens* の海軍同盟では同盟国より *contribution* [貢納] を取って第四階級 [主として水兵] を養っていたのであるから、同盟国が敗れるとこの費用 [の出所] が無くなる。かくて最初の間は *Athens* の近くの銀山より銀を掘り、それを以てこれにあてがっていたが、終にはこの第四階級は民会の勢力を利用して、貴族に対し何とかかんとか言ってそれ [貴族] より財を取ると言うことになって、その対立は益々烈しく、政治界は全く墮落して来たわけである。

かくして *Polis* [都市国家] の政治が腐敗し、それ自らの中に自らの価値を見つけると言うことが無くなって来るところから各個人は国家生活以外に *Authority* を見つける、つまり自分で作った *Authority* により自分の生活を *regulate* しなければならなくなり、この力さえもなき者の間には極めて *pessimistic* な傾向が出て来た。尤もこれには色々な派がある。

第一は新しき連中、即ち *Sophist* の話を聞いて新しきものを追い、その新しきものの刺激に追われて生活していたのであるが、これを追っている間に刺激の力が益々強きを要することとなり、終にはかかる生活は結局焦っているのみであって、生活を空虚にする所以である。内容の空っぽの生活をなしているのだと言う事に気付いて来た。

それから昔の保守党であるが、それは *Sophist* のなしたこれまでの *Norm* [法] に背いたことを考え、神の刑罰を恐れ、かかる悲観的な間から新しき生活、解脱の生活、*Romantik* な生活に強い憧れを覚えることとなり、余り智的ならざる者達は前述せる *Orpheus* 教の信仰を復活して来る。又 *Intelligent* の連中は極めて *Romantik* な

Phantasie の世界に満足を感じるということになった。かくして彼等は昔の状態を理想化し、Sparta の国家とか、昔の偉人とかを idealisieren [理想化]し、これを復活すると言う慾望に動かされて、この頃には大分 Romantik な歴史が、即ち Sparta 史、Athens の歴史が多く出ているのである。

かかる「何か欲しい」と言う憧憬の中から Sokrates [ソクラテス]が出た。彼は我々の内的生活、内的慾望を中心として practical な慾望から外界をも統一せんと努めた。即ちギリシャ古来の智徳一致の考えから自己の徳を修めることにより外界の知識を得ると言うことを主張し、Sophist の自分と外界とを対立せしむる System を破って、その実在の中に価値観念を入れて理解することにより得られたる System は Sein の System なると同時に価値の System であると主張して来た。即ち Sein たると同時に Teleologie [目的論]の System なりと主張した。そこからして、現行法も City の本質から出るものであるから、その命令の前には個人も安んじて聞き入るべきであると考え、彼又法律の前に安んじて死を得たわけである。この Sokrates の態度が解脱の生活に憧れている当時の人々を動かし、ここに新しきを求むる連中も、保守的な連中も皆等しく Sokrates の下に集まり来たり、自己のみるところによりて生活の意義を見付けんと努めることとなった。しこうしてかかる連中の中からして Kyrenaiker [キレネイ派] Epikur [エピクロス]の如きが新しき人々の中より出で、保守的な人々の中からは Plato [プラトン]の一派と Cyniker [シニカー]が出で、Cyniker からは更に Stoiker [ストア派]が出たわけである。

新しき連中から出た Kyrenaiker の哲学は北アフリカ [北アフリカ]の Kyrenai なる地に生まれた Aristipp [アリスチップ]が初めて言い出した一派である。Kyrenai の町は早くより小アジアの影響の下に出来た享樂的な港であった。Aristipp はかかる町に生まれ、既に Sophist になっていて、後、Sokrates の門に入った人であるが、彼は Sokrates の学問に魅かれたと言うよりも、Sokrates の人格と言うか、その態度に引き付けられたらしい。そこで彼の見た Sokrates の態度が苦痛なき享樂を解決する鍵があるのであろうと思って入って来たものらしい。兎に角我々の生活を regulate するものは Sokrates によれば“善”であるが、その善の内容を Lust (快樂)なりと見、この Lust は万人の求める善であり、苦痛は万人が嫌う悪である。人間の守るべき規範は本来は定められない、ただ我々の生活の中から価値観念を導き出すのでなければならぬ。ところがその我々の生活の中に自ら求めてみると結局全ての価値は Lust に帰する。ここまでは、彼の考えは Sokrates と同じである。ところが彼によれば、全ての動物は Lust を求めんと行動するのであって、子供によってよくわかる。故に今日我々の言う Justice とか法律とかは皆後天的のものである。彼の説は、かくの如くに最初は Sokrates 説であるが、後半すなわち内容になると Sophist となっている。Aristipp によると苦痛と快樂とは性質上異なるものであり、全てのものは smooth である時は快樂であると説く。又 Lust を引起こす原因は全く同じであって、ただその Quantity が異なるのみである。即ちその Dauer [持続]とか Intensity [強度]が異なるのみであると考えた。この考えからして、過去及び将来の Lust は死んだものであり、dunkel [暗黒]なものである。故に現在の Lust のみが Intensiv [意図的]なものであり、従って瞬間々々に Lust を味わって行くと言うことが最も善き生活である。しこうしてかかる快感を巧みに導き出して来るのが所謂哲人の仕事であり、哲人はこれらを最もよく知れる人である。Intensiv な快感を惹起するためには知識が必要であ

る。しかし、知識はそれ自体に価値があるのではなくして Lust の Extensivity を大ならしめるから価値がある。かくの如く subjektiv なる Lust のみを考えるのであって、Lust のためにはその原因の如何を問わぬと言うのである。この点が我々に最も注意を要する所であって、Lust とする subjektiv な心理状態のみを見て原因を問うに及ばずと考えるのである。彼等の主張によると例えば我々に恋愛とか妬みとか言う如きものは時としては苦痛を与えるが、それを瞬間々々に切って、その瞬間に於いて事実生活している者の表面だけを見ると快感であると言う。即ち精神生活の中から価値を見付ける方法が、現実生活の上に立って表面のみを滑って行くと言うやり方なのである。かくの如く上辺だけを滑って行くとは如何に言うこと、即ち、真の生活それ自身に拘束されない Lustgefühl [快楽感覚] を享樂すると言うのが、これ等 Kyrenaiker の主張であり、生活であり、理想である。つまり現実以上に立って現実と Idee の両世界の中間を見る、即ち美的生活であって、興行の無い生活であり、これを重んじて現実生活を軽視して行くと言うやり方である。こう考えると Kyrenaiker は兎に角我々の生活の中に価値を見んとするところが Sokrates に似ているが、それはしかし表面だけを見ているのであって、丁度あの Rokoko [注) フランスの華麗な芸術様式] が線の動きだけに美を見んとする傾向に似ている。

更に、その流れを汲んだ Epikur になると生活を動かさされないことを重んずる。Kyrenaiker の言う如く positiv な快感を求めると言うよりは、寧ろ快感によって満たされないような静かなる生活を送ることを以て理想とするに至った。即ち慾望を無くするやり方である。

かくの如く Kyrenaiker とか Epikur の如く Polis の生活の中に意味を見付けることを止め、今度は自己の内部即ち Mikrokosmos に則して自分を regulate することにより、生活の理想を見んとするに至ったわけである。即ち個人完成の希望は残っているのであるが、その内容が変わって来た。つまり plastic な理想ではなく線の上を滑って行く極めて formal な理想が人間の理想と考えられて来たわけである。自分の内側でもってあらゆる方面に円満に発展せしめ、そこに Harmonie を見付けると言う事になって来たわけであって、Harmonie を求める要求は形式的には存在するが内容が無くなったと言える。

同じような高踏的態度が保守的な思想の方からも出て行く。それは Cyniker の思想である。Cyniker は Antisthenes [アンティステネス] によって初められた。彼は Athens 人で、初めはやはり Sophist に学び、小アジア的な享樂生活をなした後、Sokrates の弟子となった。変化多く、浮沈常無き生活をなした人であるが、その無常なる生活に満足し切れずして、昔ありし安心せる Harmonie ある生活の時代を Romantik に憧れ、大体自分の人生観を作って、後に Sokrates に学んだ。そしてそこから自分の考えを develop せしめた人である。Sokrates の弟子となり智徳一致が根本となるのであるが、その知識と言うものが、つまり technical な現在生活の知識を取得することではなく、現在生活が無意味であるということを知るのが知識であると見るのである。即ち現在の爛熟した文化の wertlos [無価値] なることを主張し、殊に今日行わるる Demagog が自己の利益のみによるものなるを主張し、又貴族生活を誹り、かくの如き生活に入るためには狂人にならざるべからずと高調している位である。この態度は進んで社会改造即ち Makrokosmos の改革には向かわずして、寧ろ退いて自分を守り、自己の内に生活の価値を求めよと言う考えになっているのであり、即ち我々は外界のものに満足を求める Affekt [感動] を抑えて自

己の心の中に満足しなければならぬ。即ち心に城壁を作って外界の寄せ来る波を防ぐ、それには意志の強きことが必要であると説く。即ち慾望を無くする点に於いては Epikur に似ているが、かかる生活をなして世の中から軽蔑されるであろうが、その軽蔑を気にしないと言うところに人間の尊さがある。つまり自分自己の Affekt を征服するのが、哲人であると言う点を高調する。ここに於いても彼等の生活は不断の精進であり、自己に対する不断の戦争の中に自己の満足を求めんとするものである。つまり瞬間々に緊張した生活を目的とするものであって、それ等より生ずる文化の内容は問う所ではないのである。これは後の Stoiker の考え方にも強く出て来ている。即ち Cyniker の考え方では生活を plastic に見るのではなくして、やはり生活の上辺を滑っている点に於いては、前二者に於けると同様である。Plato の語によると、Sokrates が自分の弟子の○○○○○○○○に言った言葉に「お前は何時もボロボロの汚い着物を着ているが、その着物の破れた穴の間から○○○○○○が見えているぞ」と語ったと言う話がある。この傾向が後 [世] のアッシシの [聖] フランシスにも見られるところである。

かくなって来ると、ギリシャの City 生活の特色なりし文化国家の理想は内容上破れ来り、国家生活以外に哲人の生活があるのであるから、文化国家の理想は益々形式的となって来るわけである。すると結局、支那の“竹林の七賢人”と言う如き者の生活を破り乱されないとすることのみが文化国家の仕事と言うことになって来るわけで、その理想は失われたのではなくして、Negativ に、例えば国防と言う如きもののみが仕事となった。

かくなると、Rechtsstaat [法治国家] と実際には同じこととなる。ただ、法治国家の方面では公法とか私法により各個を発展せしめんとする Liberalismus が伴うが、かくの如きギリシャに於いては個人を寧ろ抑えると言うことが仕事となって来る。この点をも少し明らかにせんがために、これ等の人々の国家に対する態度を話してみよう。

つまり、今まで言った通りに皆んな考えが定まってから Sokrates の弟子になっているところから、その内容は何時も Sophist の考えである。Sophist は社会を我々と対立するものと見て、外側からこれを観るやり方である。後 [世] 十七世紀に至り、Hobbes 等が出で、その考え方と同じように Element を見つけた後、社会を復活する方法をとるのである。が、その場合に於いてこれ等 Sophist のやり方はその観察せらるる社会の中に何時でも自分が入っている。自分をふくめた意味の社会を考えているわけであるから、甚だしく脱線せざる限り皆んな社会は統一体であると考えているわけである。Cyniker の快感説の如き今日の Elemental Psychology のやる如く Element に分解して行くのであるが、自分と言うものはどこまでも統一あるものと考えているのであって、どこまでもギリシャの統一主義が表れているのである。

しかも兎に角 Sokrates の洗礼を受けているところから、人、個人と言う如き統一性は否定していない。故に彼等の考えた哲人と言う如きものは、言わば社会を represent する者とするのであって、この点未だギリシャ古来の考えが残っていると言える。そして常に自己を完成せしめることによって人類の理想を実現せんとするのである。ただその内容変じ、円満に発展するのではなく、Negativ なものとなって来たわけである。

しかしその場合に Kyrenaiker が国家生活について如何なる態度をとるかを考えると、喧嘩好きな人間にとっては政治生活に対する関心が強いわけである、支配のための支配、議論のための議論が彼等の喜ぶところであるが、しかし快感に相違がないと言うの

であるが必ずしもそれを行う必要がない。しかしこの時代には政治に関心ある者の方が、所謂 *decadent* [頹廢的] であるから、事実上は益々政治を遠ざかる事になって来た。即ち *Monarchie* [君主政] になろうと *Demokratie* になろうと *Aristokratie* [貴族政] になろうと構わない。自分の生活が乱されなければ良いと見る。

又 *Epikur* の連中は *negativ* な *Harmonie* を求めるものであって、よく言われる「日出でて耕し、日没して[眠る?]、我に何かあらん」と言う考えである。ただ、*positiv* な方面としては、無知なる者に対して我々の静寂生活の価値ある所以を説いて教えると言う *Kultus-Mission* [勤行使命] は認めている。国家はこれに就いて何とかしなければならぬとするのであるが、所謂「無為にして化する」であって、教育をやったり何かする必要を認めない。

次に *Cyniker* であるが、その理想とする哲人は元々現在生活に不満を持つ保守党から出た人々であるから、政治には無関心ではいられない。即ち万民を同化するとの義務を感じるのであって、或る *Cyniker* はこれを慈悲の心から出ると説明するが、兎にも角にも哲人は *King* であると考え、即ち靈的に支配すると考えるのである。現在の世界は無意味であるから、これを支配すると言うのは無意味である。故に、各人が現在の社会から離れて *Mikrokosmos* となって各々が戦争をせよと言うのである。しこうしてかくなると、これ又、所謂「無為と化する」こととなる。

かかる訳であるから、哲人が国家を支配すると言っても、*Sparta* とか *Athens* とか言う具体的なる国を支配するのではなく、哲人は所謂「無冠の王者」であって、支配すべき領土なく、人民なくとも構わない。要するに自分自身を支配し得さえすれば王者であると言っているわけである。

これ等の考えは、元を質せば *Mystik*[神秘教] であり *Makrokosmos* 即ち *Mikrokosmos* であると見るところより来るものであって、既にギリシャの小国分立の考えはなく、全く *Cosmopolitan* [国際的] となつている。かくして *Kultur-staat* [文化国家] の性質変じ、第二には、小国分立変じて *Cosmopolitant* となり、第三に又、彼等の思想が、大変 *aristocratic* となっている。*Aristokratie* が発生し得る所以は、尤も個人が物の本体を考えているところからも感得されるのであるが、これはこの時代になると、もう少し異なつたところから感得出来る [わけである]

ギリシャ国家の *Universalismus* [綜体主義] の特色と同じように、我々は、我々の生活に真に円満にその思想が発展して来た瞬間に於いて“哲人”であって、それ以前は“凡人”である。つまり“哲”を開く瞬間に於いて人間と違った“哲人”が発生するわけである。ギリシャが段々衰え、自分の力では理想の絵すらも見られないと言う風になって来ると、我々の先人が見付けたものを信じて、これに服従しなければならぬのであるが、若しそれが自分の理想とするところと異なつたものである時には、自分の方から作れないのであるから折衷しなければならぬ。この際に自分の内的精神生活に振り向いて考えて見た時には、それにより折衷せられたものは未だ人間らしいものになっていて、その哲人と凡人とは未だ程度の差に過ぎないのであるが、それが後になって理想たる哲人の性質が色々な性質を備えたものであるということになり、その各国の“徳”、即ち“武”とか“勇”とかを *radikal* [根本的] に理想化して行き、かかるものを全て備えた者が哲人であると

言うことになって来ると、もう既に我々の力を超越した、自分の生活を経過せざる哲人が出て来るわけであるから、哲人は性質的に別のものものと考えらるることとなる。これ後に、哲人と人間との世界が別のものとなり、ここにユダヤの思想に近づいて来るばかりでなく、哲人の言う事を守って居りさえすれば良いと言うことになり、Athens なら Athens と言う City が全て哲人に没収せらるることになり、ここに哲人に *Göttlichkeit* [神性] を与えると言うことになり、*Aristokratie* が行われ来るわけである。

これ即ち、Alexander 大帝が後に *Monarchie* [君主政] となり得た所以である。

(第五回 終了) 2001.1.25 W.P. end 中路

第六回 . 昭和九年二月六日

昨日は Kyrenaiker、Epikur、Cyniker 等の話をなし、彼等は現実生活に飽きた結果、個人自身に理想を求めんとしたが、それは結局上のみを滑って価値を求めんとしたのであって、ギリシャの plastic な傾向ではなかったとすることを見た。その間に立ってギリシャ本来の思想に立返って理想を求めた者が Plato であるが、Plato の Idee は自分自己の中にそれを求めたのであるが、その System は Teleologie [目的論] の System である。Plato にあっては当時の Demokratie の悪い状態を見せつけられたことから、彼も又その当時理想とされていた Sparta の国家を理想としていたのであって、治める者と治められる者との階級を考える極めて aristocratic な考えであった。政治組織の理想は国王が哲学者となるか、哲学者が国王となるか、どちらかでなければならぬと言う考えであるが、これは寧ろ昔の Thesmoteten(立法者) の考えを復活したものであって、Athens なら Athens 国家の言わば Inkarnation [権化] として治めるのであるとの考えである。

かくの如く Plato は自分の描いた理想国家を実現するために、色々の機会にこれを企てたのであったが、当時の国家はこれを受入れず、さすがの Plato もその晩年に至ってはこれに悲観し、哲学者は理想国家を実現すべき者なるも、もし時、否にしてこれを入れられなかった場合には退いて自ら自分自己の内に理想を見つけるべきであると考えに至り、ここに個人完成の間に理想を求めんとする傾向が出ている。殊に、その宗教の考えに於いてはギリシャの小国分立の傾向に反対なる Cosmopolitan な風が表れている。

これまでギリシャの City には、それぞれその守り本尊があって、それがその City の Symbol であったから、苟も Citizen たる者は全てこれを信じ、その祭祀に参与する義務があった。従ってそのギリシャの City が Autonomie [自治] つまり独立であると言うことのために、その祭の内容も各 City の歴史により異なるものであって、未だ全体的な宗教がない。しかし、Sophist の連中が本国に帰って来て以来、この今までの傾向を打ち破ることをなし、人類全体の宗教を建てんとしたが、彼等 Sophist の力を以てしては未だ positiv な世界宗教を打ち立てるには至らなかったわけである。

ところが、Plato に於いて初めて国家の Idee を考え、それが全ての City に gelten [通用] すると考えて行ったのであり、そこから全体を支配する如き神を考えて行ったわけである。即ち余程宗教が世界的となったが、かくして出来た神は Olympus の神々の如く個々の神々の間に Harmonie があると言うのではなく、宇宙全体に拡がる Weltprinzip [世界原則] による神であって、ギリシャ本来の考え方とは大変異なっている。ここに於いて City は各々その City 特有の神の意志により判断せられ regulate されていたものが、今度はこの同一の宇宙の真理により、神により判断される、つまり“自然法”により判断せられると言う事になった。

その Plato の思想から出て、思想の方面でこれを develop して行った者が Aristotles [アリストテレス] であり、かくの如き Polis の理想を人類全体の上を実現して世界帝国を建てたのが Alexander 大帝である。Aristotles を簡単に片付ける事は、その尊厳に拘わると思うし、それは Form [形式] と Materie [題材] のことを研究しなければならぬ問題であるが、この方面のことは、今は諸君の研究に任せることとする。

Plato 一派の classical な考えの中にギリシャ本来の理想が出て来、それを實現せんと努めたのであるが、その単位はやはり City 本位であって、それ等 City 中の優れたるも

のにより、それを中心として連合をなし外敵に当たると言う形式をとったものであるが、事実に於いてかかる理想実現の力を持った City が当時存しなかったと言える。即ち Athens は衰え、Sparta 又駄目になり、その後起こった Theben [テーベ、古代ボエチアの首都] が中心となって一時 City 連合をなしたのではあったが、或いは又小アジアに Tyrant [僭主] が生じ、これ又一時 City 連合をなしたが、これ等のものも、その実力に於いて未だ Persia [ペルシャ] に当たり得る如き敵ではなかった。

その頃、Macedonia には Kingdom [王国] を中心とする国が Philipp [フィリップ] により出来、それを中心として Korinth [コリント] 同盟が出来たのであるが、これはペルシャに当たって破れてしまった。Philipp の子 Alexander の時になり、もっと aggressive にペルシャ征服の企てをなし、ここに於いて世界帝国が成立したわけである。このことについては、Kaerst の “Geschichte des Hellenismus” [ヘレニズム史] が最も良い著述であると思う。

Alexander 大帝の世界帝国が所謂ギリシャとローマとを結ぶ中間の世界となる。この帝国の特色は personal principle の上に出来ているということである。これまでの City 同盟も、Philipp が作った Korinth 同盟も皆等しく邦 [国] が集まった同盟である。同盟中の一邦 [国] が強くなって、それが他を支配すると言うのである。又ペルシャに於いても、メソポタミヤの帝国も、皆支那の戦国時代の如くに、色々の民族を導く民族が居ての帝国であった。即ちこれまでの帝国には皆、征服、被征服の民がいたわけである。ところが、Alexander 帝国はギリシャ文化を世界に広めると言うことを目的としたところから、当時のギリシャを支配していた個人中心の Principle がこの帝国に取り入れられたものであり、個人と帝国との間に中間勢力が無いわけである。従って Macedonia とペルシャとの関係は征服、被征服の関係ではなく、そこに存する関係と言えば人民と Alexander 大帝との関係のみである。故にその下について居る者は皇帝の意志を実現する単なる機関である。そのため彼はペルシャとギリシャとを同じ footing の上に立てると言うことに大いに骨を折ったのであって、自らペルシャの王女と結婚し、又その部下にも努めてこれを勧めた。殊に、兵隊は Macedonia 兵が中心ではあるが、被征服者をもまたこの中に取入れ、ギリシャ風の兵、Alexander の兵隊を作り上げたのである。

ところが、この個人主義の上に立つ帝国の考えはギリシャの City に於いては巧く行かなかった。即ちギリシャの City は事実に於いては依然として Autonomie [自立] を維持しているわけである。しかし、Alexander は機会ある毎にこのギリシャの団体主義を打破らんと努力した。殊に、紀元前 323 年インドから帰って Babylon [バビロン] に於いて人々が Alexander を “生神” として立てんとした時に、彼はギリシャの City に命じて皆代表者を出させてこれに出席せしめている程である。

次に、この Alexander 帝国の特色は世界帝国であると言う点である。

かくの如く Alexander は Humanity [人類] を一身に具体化しているからこそ支配者たる地位を保つと見るところからして、当然世界帝国とならざるを得ない。あらゆる人間が Alexander 大帝の命に服さなければならぬ。若しそれに反抗する者あらば、その時は武力を用いてこれを従える義務がある。人の人たる所以はかかる個人の下に服する事にあると見ているわけである。Alexander 大帝にとっては世界の果てまで行くと言うのが目的であり、インドの Indus 河まで行った時にも、なお兵を遙か南の方に派出し、北方は裏海 [ウラ

ル海]方面にまで兵を出して征服せしめている。つまり、今までチリチリバラバラなりし世界を事実上に於いても統一せんと企てた。

かくして出来た帝国は、又同時に所謂文化国家であり、その内容はギリシャの文化、即ち今までの哲人により世界的に進められたるギリシャの思想を広く世界に拡張したものである。しこうして又、これまでとは異なり、貴族のみならず一般人民もこれに与かからんとしたたものであり、ここに世界文化となったわけで、かかる結果として各地方にギリシャ化された、乃至はギリシャの仮面をつけた種々なる文化が咲き出でた。東方の諸宗教もギリシャ風に翻訳せられた宗教となったのであるが、これ等が又、再びギリシャ本国へ帰って来ることとなり、ここに相互に影響し合うこととなり、かくして出来た文化が即ち Hellenismus の文化である。即ち各地の文化を平均化した、nivellieren した文化であると言える。

第三の特色は、absolute Monarchy [絶対君主政]の帝国であると言う事である。支配権の基礎は Alexander という個人が宇宙の本体を具体化しているところにある。つまり、ギリシャの考えから言えば Alexander は哲人であるとみるのであり、又東洋に於ける征服せられたる国民は、従来 of 習慣によって Alexander は“神”なりと考えている。かくの如く、何れにしても人間以上の力ある者として支配するのであるから、その下の民は国民ではなく“臣民”即ち Unterten である。

要するに、Alexander 大帝の世界帝国は、今までお話しした方面ではギリシャの City の拡張と見られるのであるが、ただ、Demokratie の考えが無くなり、全くの absolute Monarchy となったのが、その差点である。これはこの Alexander の帝国のみがそうであるのではなく、その時代がかくなっていたのである。ギリシャ思想を押し詰めて行けば、多少の形は違うであろうが、かかる思想が出て来るものであった。

以上がギリシャの思想であって、以下、次の時間からローマの方を話そう。

(ギリシャ文化の項、終了)

第六回． 続き ローマ （昭和九年二月六日）

これから羅馬〔ローマ〕のお話をするわけであるが、ローマの初め、即ち極く最初の国家成立の時の地理的・歴史的條件は大体に於いてギリシャ殊に Sparta に似ているのであって、従ってその国家構成に於いて両者は類似の諸点を持っている。

第一は、両者共征服によって国を建てたが故に、国家の主体は貴族的階級であって、その下に Clientele とか Prabi 等がついている。しこうして、これ等従属の民が後になって勢力を得、やがては Citizen とならんとする努力が、これ即ち、ローマの歴史となるわけである。

第二には、ローマでもまた Kingdom〔王制〕が発展せず、小邦〔国〕分立であり、国家が拡大すると言うことは、それに属する団体の数が増すことであり、帝政時代までは先ずこの主義である。

第三に又、全 Citizen 間の平等主義が行わるるわけで、それと同時に全体で以て外敵に対する必要上団体主義が強い。従ってその団体の中心なる役人即ち国王の地位が重んぜられ、民会が軽んじられると言う風に Sparta の構成によく似ているのである。

それにも拘わらず、即ち国家法制が同じであるのに、その国家観、即ち国家をどうみるかという Auffassungsweise が違う。これはよく注意しなければならない点である。即ち大体の条件が同じなるも、その Auffassungsweise 乃至は安んじてそう言うことをなす国民の心持が違ふと言うこと、意識が違ふと言うことは注意すべきである。

ここに於いてそのローマの Auffassungsweise〔国家観〕を知るためにローマ法のお話をしなければならぬ。

ローマの Citizen は“氏”即ち Gens より成り立っている。即ちこの Gens が集まったものであるが、その Gens は単純に同祖から出たと言う如き simple なものではない。かかる Gens が集まって更にローマ全体として三つの Tribus〔種族〕を構成している。この Tribus の起こりについては色々の説があるが、何れもそうしなければならぬと言う証拠が挙がっていない。この Tribus は風俗習慣を異にし、又言語すらも異なつたと言うのが通説である。この三つの Tribus が Tiber〔チベール〕河畔に地位を占め、外敵に対し、合してローマと言う一国を形成した時には、その団体生活に必要な minimum な規則のみが高調せられ、その Geltung〔遵守〕が重んぜられる。かくして出来た団体生活に必要な限りの Norm〔規範〕を国家の権力で強制したのが即ち Jus である。Jus は生活の各方面に及んではいるが、しかもその当時の国民の全生活には及んでいない。即ち Jus の規定以外に各民族特有の風俗習慣があつて、それが各々社会的強制力を持っていた。即ち役人が強制したものと、然らざるものとが分離したのであって、これがローマの一特色である。当時のローマ国家は、言わば団体の力で強制された範囲に於いてのみ存立しているのであり、Populus Romanus〔ローマ市民〕は法律の方面に於いてのみ考えられたものであるから、この点ギリシャと大いに異なる。Jus はかくの如く申し合わせにより出来たものであるのみならず、その後の経過に於いても契約の性質が多くなつて来ている。と言うのは Plebs〔平民〕が段々経済力を増し、ローマが拡大するに従つて多くの武士を必要とするに至り、Plebs もこの武士に参加せしめると言う事になって以来、貴族と平民との階級戦争起こり、その平和条件として所謂「十二標法」が紀元前 452 年から 451 年かけて出来上がっているわけである。かくして法律は益々両党派の妥協条件と言う

性質をまして来た。

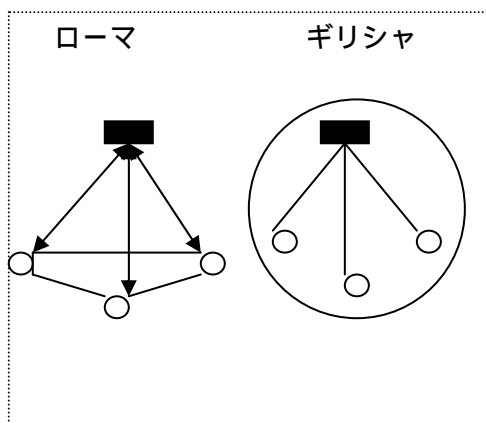
さて、この十二標法の中から我々の考えに必要なものを拾い上げて見ると、第一は権利の主体が“家”即ち Family であり、その内容は“所有権”であると言うことである。紀元前五世紀頃のローマの歴史を調べると、実際は社会組織の単位は Family であるのであって、そこに祖先崇拜が行われて結び付き合っているわけである。丁度、維新前の我が国と同じく結婚の如きも家と家との結婚であり、経済又しかりで、財産も家にくっついたものと考えられている。つまり多数の家族、奴隷を包含する家が働いているのであるが、かかる Family をローマ人が見た時には不思議にも Family を団体だとは見なかったのである。これローマ人の特色であって、Family を以て意志の Subject とは見ずして、その家の権利を“家長”の権利となしているのである。家長も、実は Family の管理権を有するに過ぎぬのであるが、十二標法は家長を以てその権利の主体なりと考え、妻子・奴隷・農地・家屋・家畜も皆等しく家長が勝手に処分し得るものなりとなす。十二標法によると、pater familiae [家長] は以上のものに対する絶対処分権を規定し、妻も財と同様に考えているのであって、一年間占有されると、夫の所有権に帰すると規定し、又時効中断の効果は妻にまで及ばしているのである。故に家長は Disziplin [訓育] のために命令するのではなく、全くこれを支配するのであり、家の意志を代表すると考えるのである。

事実として 家長は、法律のみならず風俗習慣その他いろいろな規範により制約されているのであって、上に述べた法律の規定の如くには行かなかったのではあるが、ただ法律はこれを radikal [根本的] に規定している。即ち法律は社会規範の一方面であるからして、外の規範を以てこれを補正し得ると考えたからであろうと思う。

かくの如く家の権利が家長に集中せられているが、更にローマ法に於ける権利の内容を見ると、それは所有権である。

この所有権は、ローマに於いては“掠奪権”から系統を引いていると考えられているらしく思われる。つまり所有権が中心になって、物及び人に対する完全なる支配権が権利の内容となっている。ローマでは早くから家長権、物に対する所有権、人に対する債権 (obligatio) が認められているが、この債権も Nexum と云って金を借りる者が若し返済せざる時には、それを自由に殺すことさえも出来ると言うのであって、どこまでも完全なる支配権が中心となっている。ここにローマ人の意志主義を見る [わけである]

かくなると、権利の内容は個別的に存在する個人間の支配関係である。即ち甲が乙を支配すると言う関係である。故に法律はその関係のみを regulate するのであって、



例えば家と言うが如きも、家長とその支配権の及ぶ範囲との関係だけを見ているのであるから、家を以て個人の集まりと見ているのではない。即ち本体を見るには非ずして支配関係を見るのである。故に家も statisch [静的] に“目の力”で Subjekt として見るのではなく、これを全く dynamisch [動的] に見て行くのである。つまり法律により regulate されている限りに於いて家長の支配権の及ぶ関係が家であるとみるのである。同じような傾向はギリシャ

にあっては、法律と言うものが、家なら家、国家なら国家の実体と考えられるのであるからして、先ず法律の定義を上から定めて下に入るのであるが、ローマの方では、決して家長権とは何ぞや、所有権とは何ぞやとか言う如きことから初まるのではなく、各個のものの関係のみが規定されているのである。即ち家長権の本質を考えるのではなく、個々の場合に於けるその権利の働きを規定するのみである。後になって、二・三世紀以後に於いてはギリシャ学者の影響が入って来たので、それからはこの考えが少し変わったわけである。

第二に、十二標法の特色は公法と私法とが分かれていることである。

Family を分解して、それを家長たる者の支配権と観、家に於けると同じく、ローマの Citizen という団体の意志を全て役人に identify する。役人即ち Magistrat の意志に一致せしむる。つまり Magistrat が家に於ける家長の地位にあるのであって、その Magistrat が支配する関係のみを見て行ったものが、ローマ Citizen であるからして、ギリシャの場合の如く全体に入るのとは異なる。しこうして、この Magistrat と Citizen との命令・服従関係を規定したのが即ち“公法”であり、Citizen 相互間の規定が“私法”である。

Private Law の方では、各個の個人は皆独立した権利の Subjekt と考え、従って生命財産に対する危険に対しては原則として Self-defence であって、それを国家が裁いてやると言うのは単なる仲裁人、立会人としてのみである。即ち、正々堂々と喧嘩をさせるための立会人となるのである。又契約も全く自由であるが、ただ、法律上の「効果」を生ぜしむるためには予めその契約に一定の手続きをとることを要求している。即ち契約それ自らは如何にしてもよいのであるが、その効果を国家が認めるためにのみ法律の規定に従えと言うのである。故に、ギリシャの如く法律ありて個人の権利発生するには非ずして、個人の権利最初より存して後、それを regulate するものとして法律を定めると言うやり方である。

これに反し、Public Law の方面では Magistrat が souverän [絶対的]であり、絶対権利の保持者であり、この命令には Citizen は絶対服従である。故に Citizen が役人になるとか、民会に出席すると言うことは義務としてこれを行うのである。従ってどこまでも主権者は Magistrat であり、ただそれが立法等をなす場合には民会の意見を聞いてやると言うのみであって、即ち、民会なるものは主権者の権利を行使する条件たるに過ぎない。

これはやはりローマ法の考え方が Pluralismus [多元主義]の傾向を帯びるところであり、民会を以て意志の Subjekt とは考えず、個人以外には意志の Subjekt があり得ない。故にかかる Imperium [命令権]を有する役人二人ある場合には、ギリシャにあっては Kollegium [同役]であるが、ローマでは各役人が各々自己の意志を以て案を出し、他がこれを拒絶否認する場合には所謂“veto” [拒否権]の権利を行うのであって、かかる場合には前者の案が無効になるのではなくして、それが中止されるのみである。

かく公法と私法とが全く異なった Principle で行われるのは一寸不思議のようであるが、よく考えるとこの両者は同じもの、即ち絶対支配権と言うものに起因することが分かる。ローマの Citizen を具体的な人と考えて、外部から侵害された場合は、いわゆる

Self-defence、平時にあっては自由契約であるが、その時の法律上の人と言うのは具体的に生きている人ではなく、法律に関する限りに於いての人、つまり法律上の権利の

Träger[担い手]としての限りに於いての人である。これ即ち法律上の人である。故にかく厳格なる意味に於ける法律上の個人は、また、同じく国家の法には絶対に服従しなければならぬのである。即ち法律上の効果を要求するためには、その限りに於いて彼は絶対服従なるを要する。このことは丁度民会に出席するのが義務なりと言うのと同じ関係になる。かくの如く、ローマでは支配の関係だけが問題になるのであって、人と言う Subjekt を考えていないのであるが、しかし結局後になって、この Subjekt を考える必要があるところから人とか家とか言う法律上の概念から離れた abstract なものを想定したに止まると見得るわけである。即ち Populus Romanus とか family とか人とか言うのは、仮に想定されたものであって、丁度物理学に於いては、動きの間の法則を見るのが目的でありながら、その動きを Materie [物質]とか Energie [エネルギー]とか言うものを想定して、これをその法則の行われる Subjekt とし、つまり全く目に見えない abstract なものによって考えを進める上の Träger [担い手]を想定したのと同じやり方である。しこうして、ローマ法はどこまでも支配関係である。

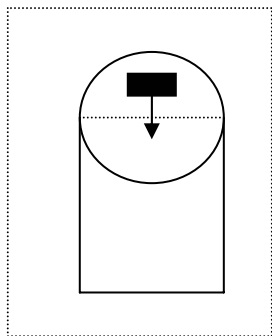
この関係を極めて Anschaulich [明白]に説明してくれるものは、ローマの建物である。ローマの建物については Alois Riegl [アロイス・リーゲル]の“Spätromische Kunstindustrie” [後期ローマの美術建築] が巧みに説明をなして、この関係を描き出しているのであるが、今日は、自分はこの本が図書館にあると思っていたところ、どうしたものか見当たらずから、これで止めることにする。

(第六回 終了) 2001.1.27 W.P. end 中路

第七回． 昭和九年二月八日

ローマの団体生活の特色を見ると言う仕事を始め、ローマの地理的・歴史的条件がギリシャ殊に Sparta に似ているが、その歴史を見ると彼等の Staatsauffassung [国制] の方法に於いて著しく違っているところから、ローマ法のことについて述べ、それが社会規範と離れていると言うことをお話した。続いて [紀元前] 五世紀の半頃に出た貴族と平民間の争いの妥協案として発布された十二標法のことについてお話して見た。そして、第一には彼等は物を pluralisch [多元的] に観ていると言うこと、又第二に国家生活に於いても支配関係のみを重視し、その関係の Träger 乃至は Subjekt として国家とか家とかを定めているだけであって、それ等は丁度自然科学に於ける Energie とか Materie とか言うものを想定するのと同じ関係であると言うことを話した。しこうして、この関係を anschaulich [一目瞭然] に目で見得るのはローマの建築である。それは A. Riegl の “ Spättrömische Kunstindustrie ” によって述べられている。Riegl の考えの中には色々自分としては同感出来ぬ点もあるが、これはローマの芸術史をお話するのではないから、ここではただ参考のためにこれを用うるのである。

Riegl の考えによると、建築物の目的は言うまでもなく人間が其処に住むべき空間、[即ち]Raum を作ることにあるが、それには二つの方法が取られている。それは Raum の境界を作る、つまり壁を作ると言うことと、第二には全体としての美的な Raum を作るということである。ギリシャ・エジプト等、何れも Raum の Grenze [境界]を作るのみであって、つまり外から見る美しさを目的とするのであって、それによって作られた Raum に美的空間を作ると言うことはやっていない。これを初めてやったのはローマの建築である。即ちローマにあっては空間それ自らを作ると言うことが目的となったわけである。ローマでは昔から Temple 又は裁判所を作る時にはいつでも、その平面図を描く



と半円形になる。つまり神像又は裁判官が座る前方が、それ等の意志の働く方向であり、その支配領域である。その後になって、人民なり民衆が集まる所に屋根を作ると言うことになり、ここに Rundbau [円形建築]が出来たので、これを多数のために延ばして出来たのが Basilica[公会堂]である。この Rundbau を又 Rotunde とも言うが、この Rotunde と Basilica との両方に、その空間に美的感じを与えることが起こったと言う。

その最もよい例は Pantheon である。Pantheon は外形から見るところは、まるで瓦斯溜 [ガスタンク] の形である。我々に問題となるのはそう言う丸天井で蔽われたガスタンクの中の構造である。その中に入った感じ、これは窓がなく天井の所から光線を取っているのであるが、Riegl の説を言うと、その中に入って見ると先ず目の前に限られた丸い床がある。中心に立って眺めると周囲が全て同じような旋律、同じような curve によって包まれ、最後に又もとの所に帰って来る。かかるところから、そこに何か限られた空間、geschlossener [閉じられた] Raum がある、乃至はその中にいると言う意識が発生する。しかもその Raum が非常に規則立ったものであると言うところから、その空間が非常に堅く感じられる、即ち丁度結晶した水晶の中に入ったような感じがする。かかるところからして、この Raum 自身が一定の形を持った物、Stoff [実体] であると言うような感じ